

やわしい国コスタリカ

小川 和枝

1日目は、小学校訪問を終えてから、バスの中からの市内観光と、国立劇場、子供博物館の見学です。

市内のあちこちには街路樹が植えられています。ちょうど花の時期を迎えたのか、紫色のジャカランダの花をはじめとして、フロネデサバナと言う桜に似た花や、黄色の花が咲いておりなかなかきれいです。町はこれといった特徴はありませんが、高い建物は少ないです。ちなみにコスタリカで一番高いのは28階です。住宅のほとんどは2階以下です。地震国だからということですが



このような街路樹があちこちに

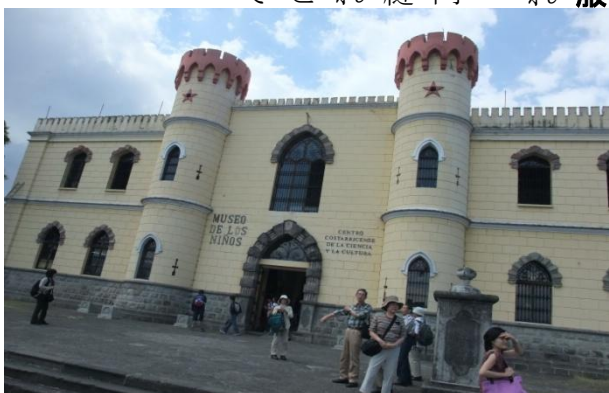
エコの国コスタリカ

昼食。茶碗四、五杯分位の量のピラフがでたことがあります。とても食べ切れなくほとんどの人が残しました。昼食が終わってバスの中で通訳兼ガイドの五十嵐さんが「みなさんありがとうございます。わたしも運転手さんも皆さんの残したものをみんなもらいました。これで夕飯は大丈夫です。コスタリカの人は食堂で残したものはみんな持ちかえるのが当たり前です。」 おお何とエコな！

こんなこともありました。コスタリカの街の角角には、**洋服などの修繕屋**さんがあり、破れた所をなおしてもらっている。そういえばモンテベルデの案内人さんのジーンズもミシンの縫い跡がたくさんあったのはあれはおしゃれではなくそういうことだったのかと納得した次第です。物をやたらに捨てない。エコですね。

子供博物館。これも廃物(?)

利用。もとは刑務所だったが手



子供博物館外観

狭になったため子供博物館に。刑務所を子供博物館にしてしまうという発想に驚きました。

2日目に見学する国会も元大統領官邸を使っている由。

そのた、一般の建物はあまり外形を変えないで、内装を変えて使うことが多いようです。1940年代内戦があった時の銃弾跡が残されている建物もありました。

コスタリカは貧しいからということもあるでしょうが、それだけでない、物を大事にする思想があるような気がしました。

ゴミの分別はまだまだということでしたが、なぜかホテルのゴミ箱は資源ごみと燃えるごみを分別するようになっていました。(道徳的にはまだまだで、家の中はきちんと掃除しているけれど、外のゴミには無関心と言っていました)

つけたして言うのと、最後の日に**アメリカのヒューストン**に宿泊しました。バイキングの朝食でびっくりしたのは、皿もコップもスプーンも使い捨て、食ベカスも何もかもいっしょくたにしてゴミ箱に捨てました。洗う手間を省いているのでしようが、大量消費の国アメリカを垣間見た気がします。

文化は国民の物コスタリカ

国立劇場。一八二〇年コーヒーの輸出により富裕層が出来るそのコーヒーの税金で建てたといわれます。(富裕層からの



国立劇場客席

が行われたかと思えば、一般市民の誰でもが気軽にコンサートを開催できる時間帯があったり(入場料一ドル)、二階席だったら二ドルで聴ける日があったりと、大統領も庶民も同じように利用できるのです。五十嵐さんによると、国民には「大統領はすごく特別な人」という感覚は薄いといふことでした。

税金で建てたということがすごいですね) フランスのオペラ座を模したもので、当時のヨーロッパ建築の粋を集め、ヨーロッパ材を使い、イタリアのデザイナーが七年かけて作ったというすごいものです。わたしたちもこの劇場の席に座らせてもらいましたが、椅子は漆塗りの様でした。1400人収容できます。

1949年「戦車(?)よりもヴァイオリン」と国民が気軽に芸術に触れることが出来るようになりました。

この劇場のロビーで女性大統領の夕食レセプション

が行われたかと思えば、一般市民の誰でもが気軽にコンサートを開催できる時間帯があったり(入場料一ドル)、二階席だったら二ドルで聴ける日があったりと、大統領も庶民も同じように利用できるのです。五十嵐さんによると、国民には「大統領はすごく特別な人」という感覚は薄いといふことでした。



女性大統領レセプションが行われたロビー。一般の人も普通に使っている

子供博物館。 入場料は具体的には分かりませんが、極めて安く誰でも気軽に利用できるそうです。

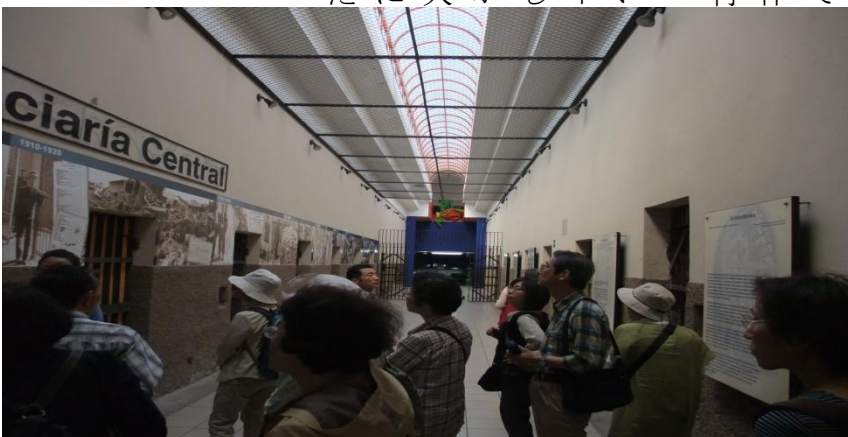
収容人数350名の所1200名の受刑者が詰め込まれた最悪の刑務所だったが、「暗闇から光へ」のスローガンのもと当時の大統領夫人により子供博物館としてよみがえった、という建物です。

入るとすぐの所が今は利用されていない牢獄で真っ暗です。その続きの牢獄はそのままの形になっていて、今は事務室になっています。(ここを必ず通過するようになってい

は面白いと思いました。悪いことをするとこんな所に入られるよと親が教えるのかしら)そこを通過すると、子供が楽しんで学べる各部屋があります。宇宙を知る部屋、体を知る部屋、コスタリカの歴史を知る部屋、地球の歴史を知る部屋、コスタリカの植生を知る部屋、などなど34のテーマがあります。「る・く・る」なんかには比べれずと粗末なものだけど、手作りの地球や、土星の模型があつて重さを比べたり、手作りの体の内臓を模型の体に張り付けて学んだりします。

スタッフは170名もいて説明してくれたり、パホームスを見せてくれたりします。鏡に半身を映したパホームスをみんなで見ても笑いをしました。このようにいかにも子供好きといった青年男女が働いています。

子供博物館内通路。
各入口は元牢獄。今事務所。



明るくフレンドリーで好感が持てました。設備にお金をかけなくても十分楽しめて、学ぶことが出来ることを実感。最後の部屋は、模擬スーパーマーケットになっていて、入り口で偽の5000コロナをもらって模型でできた野菜などのお買い物します。金銭感覚を身につけさせるのかな？私達もお買い物しましたが、私はものすごく金額オーバーでレジの人に笑われました。

コスタリカの人

最後にすごく驚いたことを。

市内観光で回っていると、サンホセの街にはちよつと似つかわしくないような大きなドームがありました。五十嵐さんによると「中国の国際援助で作ったスタジアムです。技術も材料も人も中国から来ました。しかもその労働者は罪人です。ここで働いて刑期を終えた人の中には、そのまま居ついた人もいます。」一人ひとりの人権を大事にするといつてもここまでするとは！

地震国コスタリカと先ほど書きましたが、チリ地震の時は大きな被害を受けたので、日本からもたくさんの物的、金銭的、人的援助が行ったそうです。今度の東日本大震災では、日本を助けようと有名人がサンホセに集まりチャリティコンサートを開きました。430万人しかいないコスタリカ人の内5万人も集まったそうです。(募金がいくら集まったかは忘れまじ) かつてない大集会だったそうです。

このように日本人に対してはとても友好的です。国際関係というのは軍事力ではないと実感しました。

430万人の国民に対して100万人の難民がいます。人権を大事にしているコスタリカでは難民も医療費はただ、難民の子供の教育費もただ。貧しくても人権ということに最大の援助をするコスタリカには頭が下がります。

コスタリカでも教育、医療、人種、労働などさまざまな問題をいっぱい抱えています。でも、99%の人が軍事力は要らないとインタビューに答え、人間(自国民のみならず)の為に税金を使う国をうらやましいと思いました。

五十嵐さんと言う素晴らしいガイドさん、藤井さん、旅行社の田嶋さんのおかげでとても有意義な旅が出来ました。

これが山のように出たピラフの時のメニューです。(下の写真全部)



国立劇場は一八九〇年に建てられたもの。客席やランプなど当時のままの物を使っています。

国会議事堂です。戦乱があつて国会議事堂がなかったもので、とりあえず大統領官邸を使いそれをそのまま現在まで使っているといえます。

わたしたちは事務室のような所を通つて、薄暗い階段を上つて二階にいき、ちよつと広めの記者室のような所に案内されました。一人用の机と木のいすに座り説明を受けました。わたしは何でこんな所で説明を受けるのかなあと不思議に思いましたが、なんとそこがまぎれもない国会の議場で、私達の座っている所は議員さんが議論するところなのでした。前方はちよつと高くなつて左側に演説台、中央に議長席、後方に木の椅子が五、六個あるだけです。議場はコの字型で全員(議員数五十七人)の顔が見られるようになっていきます。国会は立法府なので大臣はここには列席しないそうです。国会が開かれると大統領は簡単な挨拶をするだけだそうです。

国会議事堂を出て振り返つてみて、「どこの建物だったの」ときいても「あつちの方から出てきたことしかわからない」と誰かが答えてくれました。そのくらい普通の大きな家なのです。通訳の五十嵐さんはコスタリカ人のいい加減なところと言っていました。が、権威主義的ではない使えるものは上手に使う人々と言う印象を受けました。

選挙。

解散がないので大統領・国会議員・知事の選挙は同時に行われ、四年に一度の選挙日も決まっている。個人への投票ではなく党への

投票となる。党は割合簡単に作れる。党員資格はコスタリカであり、21歳以上の犯罪歴のないこと。以前は再選禁止法で1度やつた人は立候補できなかったが、2006年に改正され、今は元大統領の女性が大統領になっている。(一期以上休まなければ立候補できない)

18歳以上のコスタリカ人に投票権がある。セドラといわれる身分証明書を持つて投票する。

選挙運動は自由。戸別訪問、街頭演説、個人演説、結構何でもあり。政党色の टीーシャツを着てお祭り騒ぎでやっているようです。おもしろいのは最後の日には色々な政党がそれぞれの टीーシャツを着て一つの選挙カーに乗り合わせ自分の政党に投票をと呼び掛けるとか。

選挙日の前後三日は酒の販売禁止。これには批判も多いとか。

選挙当日は子供選挙もあり、模擬投票もできるそうです。つまり、親と一緒に投票に行つて、自分の考えで(もちろん親の影響大でしょうが)投票することを実践的に学びます。こういうことを体験しておく投票にも抵抗がなくなるのではないかと思います。

それでも1996年には18%だった棄権率が2010年には40%にまでなつてしまつたとか。

軍隊・平和

1882年 世界で最も早く死刑廃止を決めた国の一つ。

1948年 憲法で常備軍としての軍隊を廃止した。しかし有事の時は軍隊を持つとして。 「ピストルを持つ人と持たない人では、あなたはどちらの人と友人になりますか」 答えは自明の理。

このように99%の人は軍隊を持つ必要はないと考えています。国民の大多数は、他国とのめんどろは国際的な機関があるからそこで解決すればよいと考えているようです。なので再軍備の世論が盛り上がったことは一度もないということです。

人権

最高裁判所。日本とかなり印象が違います。わたしたちが行ったところは人権小法廷というところです。

まず、建物。普通の役所、役場と言ったところに案内されました。市民がいすに座って何か順番を待っています。広さは20坪はないと思われる部屋です。そこを素通りしてまた小さな部屋へ。(部屋と言ってもただしきりがあるだけの) 2、3人の職員がコンピューターを見ています。また次の仕切りの部屋にも2、3人の同じような人が。裁判所はどこかなあと思っているとまさにそこが裁判所なのです。その部屋で私達はぎゅうづめになりながら説明を聞きました。もちろん立つたままです。

コスタリカ中のだれでも子供でもどんなに田舎に住んでいても、人権が脅かされたということがあれば形式は問わず、メモでもノートも端切れでも書いてここに提出。送りがたもメールよし、手紙よし、直接ここにきてよしです。第一段階で必要な書類などの助言を受けたり、是は人権問題ではなくほかの案件に入るなどの助言を受けたりします。書類が人権委員会に提出され判断が下されるということです。再審とかはないそうです。あくまで此の人権裁判所は独立していて憲法に違反していないか、人権は守られているかを判断するので、「コスタリカ国会がイラク戦争に賛成するのは人権を尊

重していない」という学生の訴えが勝訴したり、小学生の訴えが認められたりするのは。裁判が身近かなものであり、とてもシンプルなことに感動！さつき来ていた普段着の普通の人たちは人権委員会に訴えている人たちなのでした。

難民の子の教育費がただ(難民は100万人もいるのですよ)、コスタリカに居る限り私達旅行者でも医療費はただ、というのはどんな人でも人として生きる権利がある、それは人種や立場を超えたものであるという深い思想があるように思いました。

この人権思想で更に驚いたのは、有名人にあっても知らんふりをしていなくてはいけないということです。つまり有名人であっても町を歩いているときはプライベートな時間である。その時間を他人が勝手に奪うのは人権侵害という考えです。五十嵐さんもまだコスタリカに来たばかりの頃、レストランで有名なサッカー選手に会い、近づいて行こうとしたら友人にひどく怒られ腕を引っ張られて外に出されてしまったそうです。そういう国ですから外国から有名人が休暇で来るのがよくあるとか。みんな無関心に接していますので。

教育

私達が訪ねた小学校は在籍数1800人という大きな学校ですが3部制と言うこともあって学校規模は600人の大きさです。ここは経済的に大変な子どもたちが多くいる学校と言うことでした。そのため国からの援助で特別に1食分の栄養を確保するため1食は給食が出るそうです。給食費が足りない分は校長の裁量で寄付を募る。教育費は幼年1年と小学校から大学まで無償ですが教科書などは有料です。教科書が高く買えない子もいるのでお古を使ったり

奨学金を貰ったりしているようです。
初等教育の無償化が始まったのは1868年と言いますから驚きです。

高校を卒業しても大検を受けて合格しないと大学受験の資格は得られません。また、興味深かったのは、大学院はその学生が卒業して空きがでるまで受けられないそうです。わがガイドの五十嵐さんも博士課程で空きがなくて待たされたそうです。つまり大学院は1年生がいるときは2、3年生はいないということになります